

2017. 10. 17 (火)

お金と幸せ

森 康 俊

お金の話はタブー

「幸せって何だろう」というテーマで、何を話そうかと考えたのですが、誰も正面きってお話されないであろう「お金」をテーマにしようと思いました。愛や健康も幸せな暮らしや人生にとって、とても重要なことですが、おそらく、打樋先生がいつもお話されていると思いますので、私はあえて、お金の話をしようと思います。

実は、大学でお金の話をするのは、とても困難です。たぶん、誰も本当のことを話したくないと思います。それは、大金持ちであれ、小金持ちであれ、ほとんど貯えのないその日暮らしの人であれ、お金の話をするのは、「はしたない」、「下品である」という共通のイメージがあるからだと思います。

もとより、本当にお金があれば、世間に知られたいと思うのは人情ですし、逆に、困窮している場合も同じく、人に知られたいことでは、ありません。また、お金の話は、何か後ろめたいイメージがあるものです。大学でお金の話ができないのは、このような、私たちの心の問題であると思います。

儲け話は確かにある

「本当に儲かる話があれば、他人に教えるわけじゃないか」という言い方は、詐欺に引っかからないようにするための戒めですが、私の経験から、ごくごく一部ですが、世の中には、実は〈錬金術〉のようなことは確かにあると思っています。例えば、確度の高い情報を得て株式のカラ売りで儲けるような人、業績の悪い会社を、業績の良い会社の利益を見かけ上、下げるために売却（バイアウト）して、悠々自適に生活に入った人、海外の金融機関と連携し、意図的に計画倒産させて、利益を別の資産に変えた人、法令上、実にヤバい、ギリギリのケースもありますが、莫大な資産を形成するには、一定のスキームがあることは事実です。そうした世の中の抜け道の存在を感じ取る人ほど、「実は、今こういう投資話があります…」という詐欺師のことに騙されます。まったく、知識がなければ、単純に警戒することになるので、逆に引っかかりません。このように、お金の話は、ダークで、裏の世界に通じる分野なので、胡散臭く、危険な香りに満ちています。

お金の動きの意味が理解できなければ、社会は理解できない

とはいえ、大学には、経済学部がありますし、商学部があります。財政政策、景気循環、金利と為替などについての授業があるはずですが、社会学部生の皆さんは、僕の勝手なイメージですが、法律や経済の話は難しいとか、わかりにくいとかいう感覚があって、自分にはあわないと思っているから、消去法によって、社会学部を選んだのでしょう。その気持ちは理解できますが、社会は、法律とお金のお話を理解せずして、わかるわけがありませんので、そうした皆さん自身の学問上の弱点は、ずっと心に留めておいてください。そうすれば、いつか逆に、法律とお金のお話わかるだけでは、決して社会が理解できないのだということに気づく時が来て、自分が社会学を学ぼうとしたことがはじめて意味あることと感ずることができるようになるかもしれません。

縁が切れていく社会

さて、時々、お金、一万円札の札束がゴミ収集場所に捨ててあるというようなニュースに出くわすことがあります。皆さんは、何でそんなことするのか、「意味わからん」というように感じませんか。捨てるんやったら、俺にくれとか。いや、俺がじゃくても、福祉施設の玄関前に捨てれば、役に立つかもしれないやんとおもういませんか。なんで捨てるん。なんでかわかる人いますか。わかりませんか。

答えは単純です。表に出せないお金、使うことがそれを持っている人にとって、捨てるより余計に損になるようなお金だからです。

世の中には、銀行や証券会社などの金融機関、税務署が把握できないようなお金の流れがあります。例えば、非合法の活動、薬物売買や売買春などで現金がやり取りされるのは、明白な地下経済の一部ですが、合法の活動からも、節税などで、「たまり」と呼ばれるお金ができてきます。銀行や税務署が把握できないお金は、基本的に、日本銀行券、つまり現金のままどこかに保管されることになります。一度でも銀行に預ければ、相続時には税務当局に把握されますので、富裕層は一定の現金を保有しているものと考えられます。土地やマンションを買って、現金を不動産に変えて保有したら良いのではないかと思う人がいるかもしれませんが、取引すれば税務当局にやはり把握されてしまいます。

ある人たちは、日本の税務当局の権限が及びにくい、海外に現金を持ち出そうとします。世の中には、フランクミュラーのような高級時計があります。「1,000万円の時計なんかいったい誰がするんや」という感想では、子どもの反応です。心斎橋で2,000万の時計を購入し関西空港から香港に飛びます。リムジンに乗り、カオルーンに到着して、専門店ではほぼ同じ値段で買い取ってもらい、そのまま銀行のカウンターに向かいます。これで、日本円のキャッシュを、米ドルやその他通貨の海外預金に変えることができました。現金の持出は外為法で規制があります。フランクミュラーも、ブレゲも、僕のGショックも…。時計という商品は日用品です。原始的な手法ですが、こういうことが理解できるかどうかは重要です。お金について、大人がやっていることを、子どもの世界では想像できません。

現在、金融庁の調べでは、10年間出入金

記録がない、いわゆる休眠口座の預金が毎年約 850 億円も発生しているそうです。これは、何も大金持ちのお金ではなく、全国の人々が少しずつ、その存在を忘れてしまった口座に残っているお金をかき集めた額です。預金はもちろん、個人の資産ですから、国も銀行も勝手にどうこうするわけにはいきません。しかし、そのような忘れられたお金が増えているのです。不動産でも事情はまったく同じです。所有者不明で相続登記がなされない土地は、九州の面積を超えるともいわれています。

私たちは毎日必死で、少しでも多くの給料がもらえればと思って働いているわけですが、日本に到来した少子高齢化という社会全体のトレンドは、誰のものかわからないお金、誰のものかわからない土地、表では使えないお金などを生み出しているのです。とても逆説的ですし、いろいろと考えさせられますね。

バブルという昔話

少しお話を身近なものに戻しましょう。今、日本はインフレ、デフレどっちかわかりますか。今、日本は物の値段が上がらない状態が長らく続いていたのを、国が意図的に、お金を世の中に流すことによって、ゆるやかに物価を上昇させていこうという流れで進んでいます。デフレ脱却といわれます。皆さんは、ユニクロに代表されるような低価格商品が消費のトレンドを牽引する時代の中で育ち、大学生になったわけです。

皆さんのお父さん・お母さんは、私や打樋先生と同じく、昭和の終わりから平成の初めにかけてのバブル時代に 20 歳台を過ごした

はずです。株価の指標である日経平均が最高 4 万円近くまで行きました。今は 2 万円くらいですね。2009 年～2012 年の民主党政権時代には 1 万円を下回る時期が続き、アベノミクスで、漸く 2 万円台になったという感じです。それが 4 万円近くあったのです。当時、90 分間家庭教師をすれば、数万円にケーキとコーヒーが付いてきました。スマホもケータイもまだありませんが、幸せな大学生活だったと今から振り返ると思います。留守番電話機能がつき始めていたので、銀行のホワイトボードに、大学名と電話番号を書いておくと、仕事が見つかった時代です。リクナビもマイナビもまだありませんが、リクルートのような会社から、下宿の部屋が埋まるくらいの紙の企業資料が届き、内定はいくつでももらえますが、断るのが難儀で、決めた後は拘束のため、軽井沢や伊豆の保養所でテニス三昧という同級生も多くいました。幸せがどうかは個人の主観ですが、バブルがはじける前までは、もちろん、イケイケで、その時代を謳歌している若者には、ラッキーだったと思います。

インフレの世界

そんな 80 年代末から 90 年代初頭、私はたまたま縁があって、南米のブラジルを 2 ヶ月ほど旅行する機会がありました。沢木耕太郎の『深夜特急』みたいな感じです。もちろん、それほど冒険譚ではありませんが、それなりに、若気の至りの青春旅行でした。1989 年の夏、今から 28 年前のことです。私はバブル時代の大学生として、アルバイトで稼いだ 50 万円ほどを、すべて米ドルに換え、7 割をトラベラーズチェック、3 割をキ

ヤッシュで、バックバックに小分けにし、成田空港から飛び立ちました。

円やドルやユーロに相当するブラジルの通貨単位は現在、レアルというものになっています。89年当時は、クルザードという通貨単位をクルザード・ノヴォ（新クルザード）に変えるデノミネーションが行われました。デノミとは、通貨の単位を切り下げることです。日本人には、感覚的にあまり理解できないものですが、来月11月から1万円を10両に換えるというようなものです。数値を1/1000にして新しい単位を付ける、今の例だと、両ですが、ブラジルの場合は、クルザードを新クルザードにするよということです。

どうしてそんなことをするのか。毎日、物価が上がり続けるからです。インフレ。それもハイパーインフレと呼ばれるものです。実際、どのようなことが起こるのか。成田を出発したヴァリグ・ブラジル航空は、約14時間かけて、ロサンゼルスに到着します。その間、さすがにブラジルの航空会社です。食事提供の時間以外も、座席クラスに関わらず、美味しいエスプレッソ（カフェジーニョ cafézinho）を、プラスチックのデミタス容器で、何回も提供してくれます。僕は、喜んで何度もおかわりをもらい、初めての海外旅行の緊張もあって、頭がギンギンにさえていきました。ロスでクルーは全員交代し、乗客は3時間ほど空港内で待ちます。旅慣れたビジネスマンは、歯磨きしたり、仮眠をしたり、身繕いをして過ごします。こちらは若造ですので、要領を得たいと周りを眺め、右往左往します。カフェインの効果で頭は冴えていますが、身体は疲労が蓄積します。まだ、エコノミークラス症候群ということばも

なく、ふくらはぎのうっ血した痛みを和らげようとターミナルのイスにあぐらを組んで時間をやり過ごしました。そこからまた、14時間ほどかけて、まずリオデジャネイロに、そこから最終目的地サンパウロに着きました。知り合いの商社マンが出迎えてくれ、その方の住まいで休ませてもらいました。目が覚めたら、まる1日カレンダーがぶっ飛んでいました。30時間以上、連続で眠ることができたのは、その時だけです。あんなにコーヒーを飲んだのにです。翌日は、サンパウロで有名な一流のお店で食事をしました。当時の日本人の感覚では、2から3万円するディナーという感じですが。実は、その支払い額で、2ヶ月後、帰国前、空港のカフェでカフェジーニョ1杯も飲めない。つまり、300円が3万円になるということです。たった2ヶ月間の旅行中にです。これがインフレです。このような経済状況では人々はどのように行動すると思いますか。そうですね。お金のあふなら、価格の安い内にお買いだめすることです。日本でも、似たケースは1974年のオイルショックの時にありました。ブラジルのハイパーインフレは、高級ディナーの値段でエスプレッソ1杯のむのが精一杯になるというものなのです。

一方、ブラジルの人々がそのような経済状況下で大変な思いをしている中、アメリカの通貨、米ドルを持っている僕は、銀行の公式レートではなく、両替屋の闇レートで、少しずつ、現地通貨クルザード・ノヴォに両替していくことで、2ヶ月間、友人と「大名旅行」ができました。つまり、リッチな旅行ができたというわけです。

大人になること

ヒト、モノ、カネが実際にどのように動いているかを、自分自身の力で、正しく把握することは、自分自身と大切な人を守ってくれます。

社会というのは、それ自体を実態的に捉えることは難しいのです。つまり、社会自体は、目に見えるような形で取り出したりすることはできません。社会とは、今日お話ししてきたように、ヒト、モノ、カネが絶え間なく移動していることの結果、派生的、二次的に見いだされるものなのです。

お金について考えることは、一般論として、「大人になる」ことだと僕は考えます。そして、お金は、愛や健康と同じく、幸せな暮らしと人生の基盤であると思います。同時に、やはり、お金について語ることは、若干

はしたないことだとも思います。ですから、密かに、自分で考えましょう。本来、チャペルで話すようなことではありません。でも、キリスト教とお金に象徴される世俗的な欲望の関係が重要だということは、社会学部の学生ならおわかりですね。

最後に、ブラジルに向けて、成田空港を立つとき、米ドルのチェックとキャッシュと同様に、バックパックに忍ばしてたくさん持ち込んだものがあります。それは、現地の人々に、米ドル以上の交換レートでたいへん喜ばれました。米ドル以上の威力を発揮したわけです。それは、お金と同様、愛と健康に必要なものでした。静かに聞いてもらい本当に感謝します。皆さん、ありがとうございました。打桶先生、貴重な機会を与えてください、ありがとうございました。

(社会学部教授)